

## 会議・視察報告

### ウラジオストク・延辺視察報告

ERINA調査研究部長 中村俊彦

2007年9月3～7日、(社)北陸建設弘済会による助成研究の一環で、ロシア沿海地方ウラジオストク - 口中国境 - 中国吉林省延辺朝鮮族自治州・琿春 - 延吉を視察した。

筆者にとって久しぶりのウラジオは、かつての危険な香りがする港町 - というイメージを脱皮して、華やかな表情を見せるようになっていた。24時間スーパーはもう当たり前、いちばん驚いたのは、もちもちの本格的なピザを出すレストランまでできたことだ。ただ、デコボコ舗装と段差の多い歩道に難渋するのは相変わらず。きめ細かい都市整備は、まだこれからのようだ。

そんなウラジオでいま最大の関心事が、2012年に予定されるAPEC(アジア太平洋経済協力会議)首脳会議の開催だ。街には「オリンピックはソチで、APECはウラジオで」というサインが各所に掲げられ、その経済効果に大いに期待がかかっている。

APEC関連事業について聞こうと、9月4日、沿海地方政府都市開発部ユーリー・ダンチェンコ副部長兼主任設計士を訪ねた。8月に政府決定された2013年までの「極東ザバイカル発展プログラム」の中でも、沿海地方南部・ウラジオ周辺で1,470億ルーブルの国家予算が投入され、APEC関連施設を含むインフラ整備がされることになっているという。

APEC関連施設としては、ルースキー島に拠点となるビジネスセンターとサービス施設を建設し、主なインフラ整備としては、道路の新設・更新、ルースキー島への橋梁(写真 = 1.65km、最大高70m) ウラジオストクから北部へ



写真 架橋計画図(提供:沿海地方政府)

の橋梁、ナホトカとの道路・鉄道、空港更新、上下水道、浄水施設、ゴミ処理・リサイクル施設、エネルギー・集中暖房関連施設、遠距離通信施設などが予定されている。ほかに民間投資でホテルが、地方政府予算でコンサートやスポーツなどの総合コンプレックスが考えられている。

課題は2つ考えられる。その一つは、APEC開催にこれらの建設が間に合うかどうかである。視察後、橋梁設計開始が伝えられる一方、現地でもAPECの実現を危ぶむ声がある(ERINAメルマガ「北東アジアウォッチ」No.74、No.75参照)。

もう一つは、こうした都市計画がビジネスチャンスに結びつくかどうか。これまでウラジオストクなどと交流を重ねてきた地方都市では中小ビジネス交流が再び動き出しつつある状況にあり、極東ザバイカル発展プログラムと相まって、この機会にビジネスチャンスをとという期待が強い。しかし、モスクワを舞台とするメジャービジネスが中心となるだろうと予想され、ロシア極東と中国経済が急接近する中で、日本の地方都市にどれだけビジネス機会が創出されるかは未知数である。

9月5日、クラスキノで昼食後、口中国境を越える定期バスに乗って、中国・琿春に入った。韓国・束草から東春フェリーに乗ってきた団体観光客の観光バスより先に通関し、時計を3時間戻して時差を合わせると、また昼食時間になった。

琿春での訪問先は、小島衣料(琿春)服装有限公司。2005年10月に琿春で衣料縫製を始め、「北東アジアフェリー航路」などこれからの日本海を横断する航路の鍵を握る荷主である。この日は、本社から琿春に着任したばかりの村山文夫総経理助理に案内してもらった。

琿春工場の現在の就業人員は約1,000人、月産4万着以上だが、目標は3,000人、月産20万着に置いている。そうなれば、週2便の船を動かせるぐらいの量(30～50TEU)になるのだという。生地の大半は名古屋の物流センターから、製品の90%は日本向けで東京、名古屋の物流センターから大手デパートなどに納入される。物流コスト・時間で有利な場所を探して行って、琿春に落ち着いた。そのうえ日本語ができる人材が豊富な琿春は、グループ全体のCADセンター機能を担うことにもなるだろうとのことである(写真)。

翌6日、延吉で訪れた神豊情報技術(延辺)有限公司の中溝正俊総経理も、進出理由について、口を揃えるように



写真 小島衣料理春工場のCAD工程

この地域の優位性を挙げた。つまり、教育水準が高いうえに日本語ができる人材が多い、州政府や市政府の高官が極めて親切で信頼できる、ということである。

神奈川の「神」と豊田の「豊」を持つ神豊情報技術は、神奈川トヨタグループであるシンポー情報システム（株）の100%出資会社。ソフトウェア・システム開発という業態から、ロジスティクスの立地条件にはこだわらないだけに、人件費や同業他社との競争などの諸要素を考え合わせ、延辺への進出は小島衣料以上に必然だったであろう。

先ごろ、北東アジアフェリー航路の就航を2008年3月下旬とすることで関係者が合意し、航路を運営する4カ国合弁会社が年内にも発足することが伝えられた（新潟日報2007年11月10日）。新潟市から八バロフスクへの花卉・果物などの輸出、浜田港からウラジオストクへの積極的なアプローチ、秋田港の新たな航路開拓の動きなど、地方同士の対口経済交流が再び活気を帯びようとしている。中国・延辺州にとっては、航路開拓、企業や観光客の誘致は地域おこしの起爆剤だ。こうした需要や期待に応えられる北東アジアフェリー航路であるために、運営会社の役割は大きい。

同時に、今後の経済交流拡大に備え、北東アジアの物流・人流の現状と展望を捉えなおす時期かもしれない。最近の北東アジアの動向を踏まえ、視察を終えての感想である。